

## 美術の窓(89)

## 連続講演余録―そして「日本の陶磁」展へ

大和文華館館長 水田 徹

アテネ五輪の開催を記念した連続講演も、いよいよ当日を迎えるばかりとなりました。お陰様で準備作業中にもいろいろと新たな発見がありました。そのひとつを、時間の関係で講演会では触れられそうにありませんので、ここに余録という形でご紹介致します。

バルテノン神殿付属彫刻群の量と質に鑑み、それがその後のギリシア彫刻に大きく影響したであろうことは容易に想像されます。現にバルテノン完成後に制作された墓碑浮き彫りに、例えば北ギリシア・テッサロニキの考古博物館所在のものが一例ですが、東フリーズの供物を運ぶ少女と見紛うばかり静謐な女性像が登場します。フリーズ制作に携わった彫刻家がバルテノン竣工後にギリシャ各地に分散し、その一人がこの墓碑を直接手掛けた可能性も十分に考えられます。

絵画にも、といっても当時の壁画類はすべて失われ陶器画しか現存しませんが、その陶器画にも影響が及んだことは、講演でも幾回

かご覧に入れました。しかしここにご紹介する作品は(図参照)、単にテーマや図柄が共通しているというだけでなく、バルテノン・フリーズの形態と制作意図を見事に咀嚼し、自らの造形の魂としていると思われるのです。

「クレオフォンの画家」という学名の付いた逸名のアテネ陶器画家が描いたもので、絵柄の様式から、制作年代はバルテノン・フリーズ完成直後の紀元前430年代後半と判断されます。出土地は当時アテネ製の陶器を大量に輸入したエトルリアの古代都市跡スピナ(現中部イタリア、フェッラーラ近郊)ですが、器の正・裏面に描かれた主題からみて、本来はアポロンの聖地デルフォイに奉納するべく制作されたものでしょう。

ここに図示するのはその正面の図で、画面右端に4本(2本づつずらし描きされています)の円柱で神殿が暗示され、その中に玉座するのがデルフォイの主神アポロンです。バルテノン東フリーズのアポロン像と同じように頭上に月

桂樹の冠を戴き、オリーブの枝を手にはしていますが、背当てに片ひじを掛け、上半身を斜め前方に開いたポーズは、同フリーズ左半のゼウス像と瓜二つです。特にオリーブの枝の握り方は全く等しく、枝先が右肩へ掛かる案配は、ゼウス像が手にした王杖の先の、今は失われた彩画部の復元にも大いに役立ちましょう。

オリーブの枝の下端が2本の円柱の間に覗いて見え、世界の中心を示すオンファロス(膺石)がさらにその奥に重なって描かれているところも、旧来の陶器画にはない細密な奥行き表現で、こうした表現がバルテノン・フリーズの随所で果敢に試行されていたことは、講演でも繰り返し指摘いたしました。

このオンファロスの陰に立つ有髭の男性の立ちポーズと衣裳は、杖の有無を別にすれば東フリーズの指揮官(人物番号47番)の生き写しです。顎を突き出し遠方に目をやる仕草も、全く同形です。注目すべきはその視線が、講演でくどくご紹介した像相互の形の対応関係のあり方という観点に照らして、有髭の男性の左4人目に立つ青年に向けられていることは間違いなく、かつ、その青年が酒杯を携えているという点です。意味内容的にも、俯き加減の真摯な顔貌表現においても、この青年はお話しした東フリーズの少女55番の正に申し子であり、同じ精神構造、同じ宗教意識の所産と申せましょう。

圧巻は続く犠牲獣の図像です。首まですっぽりマントを纏い、その下で右腕を上げ、左手の指をマントの端から覗かせて粛々と歩む青年たち、同じ図像はバルテノンの南北両フリーズの犠牲獣行列図にも繰り返し登場しました。とりわけ俯いて牛に同伴する青年とこれを振り向く仲間との眼差しの交錯の仕方は、北フリーズの羊に同伴する二人の青年のそれを逐一踏襲しています。その青年たちの気配を察知し牛が黒目を巡らすところも、画家は決して描き忘れていません。まことクレオフォンの画家こそ、バルテノン彫刻の様式と精神を見事に引き継いだ陶器画家と申せましょう。

ギリシア陶器も基本的には生活ないし祭礼用具であり、その絵付けはいわゆる「用の美」の原則に従います。しかし紀元前5世紀になり、外形だけでなく仕草や表情まで細部描写し、登場人物の心理や内面を表すようになると、それに応じて像が大きく描ける大型の器や構図、器壁を大きく確保できる器形が好まれるようになります。クレオフォンの画家はそうした傾向の頂点に立つ絵師です。

翻って我が国の陶磁で言えば、人物図と風景図の差こそあれ、初期伊万里の〈染付山水文大皿〉や伊万里の〈色絵松竹梅文大壺〉などに同じような傾向が認められるのではないか、そんなことも考えつつ、今回の展覧「日本の陶磁」を心待ちにしているところです。



図1.クレオフォンの画家  
渦巻把手クラテル  
スピナ考古博物館蔵

図2.同 部分図(展開写真) 撮影：小川忠博

